

『資本論』の世界

—アルチュセールの『資本論』解釈をめぐって—

高須賀義博

ここ数年來わたくしの方法論的関心の焦点にあったのは、資本主義の構造分析と循環分析の関連であった。この問題について現在暫定的に到達している結論は、マルクスの『資本論』が解明しているのは資本主義の長期的構造であって、それは資本の現実的競争が必然的に生み出す産業循環の全プロセスが、平均化機構となっているがために、それから抽象される平均概念によって一つの完結した体系として叙述される平均世界であるというものである。このような主張をするにあたって今までのわたくしの論述は、産業循環が『資本論』の世界を一つのシステムとして設定せしめる平均化機構であるという点の指摘に急であって、平均世界の内容や性格について

はいわば自明のものとして論及することが少なかった。本稿はこの欠落をうめる目的のもとに、アルチュセールの独得の『資本論』解釈を検討しようとするものである。わたくしの立論とアルチュセールのそれは、結論においては一致するのであるが、その根拠づけは根本的に異なる。この点を明らかにすることが本稿の最大の焦点となるろう。

アルチュセールは、すでに知られていることとは思いますが、政治的にはフランス共産党の「ユーロ・コミュニズム」に反対して敢然としてプロレタリア独裁を擁護するれっきとしたマルクス・レーニン主義者であるが、理論上では「マルクス主義は、反ヒューマニズムであり、

反歴史主義である⁽¹⁾という独自の解釈をもち、この構造主義的マルクス解釈を正当化するためにマルクスの沈黙を解説するという「徴候的」(symptomatic)な読み方を試みた哲学者である。徴候的読書法とは、「マルクスの叙述の外見上の連続性のなかに脱落、空白および厳密性の欠除を識別すること、すなわち、マルクスの叙述自体のなかにあるマルクスの叙述が語られざる沈黙にすぎなくなるような諸々の場所を識別する」ことであり、マルクスの叙述の中に「その言葉が隠している沈黙」をみだし、その「沈黙の声」を回復させるために、つまり、マルクスが沈黙したものの「深部の連続性を回復するため」に、「真の」テキストを復原する⁽²⁾というマルクスの読み方なのである。このようなマルクスの読み方は、マルクスの書いたものの文義的解釈だけが正統であるとする教条主義的マルクス解釈学が依然として根強いわが国においては、その成果の当否は今からみるとしても、十分に注目してよいと思われる。マルクス解釈学がマルクスの文章の文義的解釈の水準から脱却しなければならぬのはいうまでもないであろう。

本論で取上げるのは、主として『資本論を読む』⁽³⁾(一)

九六八年)所収のアルチュセールの論文である。この論文の主題はいわゆる「歴史・論理説」批判(かれの言葉でいえば歴史主義的マルクス解釈の批判)であるが、本論はこれについては特別に取上げることほしない。本論は狭い意味での『資本論』解釈に限定することとし、取上げる論点は、(1)経済学の方法、(2)『資本論』の対象、(3)剰余価値論の意義の三点であり、最後にアルチュセールの立場とわたくしの考え方の相違点をのべる。

一 経済学の体系

『経済学批判』(一八五九年)出版前後マルクスは自己の経済学体系の全体像を幾つかのプランとして書いているが、マルクスによれば、かれの経済学体系は「経済学的諸範疇の批判」であると同時に「ブルジョア経済体制の批判的叙述」⁽⁴⁾である。「経済的諸範疇の批判」が何故同時に「ブルジョア経済体制の批判的叙述」になるかといえば、「経済的諸範疇は、物質的生産の一定の発展段階に照応する歴史的な生産関係(および交易関係)の理論的表現」⁽⁵⁾に他ならないからである。

問題はこの「批判的叙述」をどのような順序でもって

展開するかということであるが、その点についてマルクスは大要以下のようにのべている。かれはまず研究の方法と叙述の方法をわけ、経済学研究の出発点は、われわれの表象にある現実の経済（ブルジョア社会）である。それは「物質的生産の一定の発展段階に照応した歴史的な生産関係」のもとで諸個人が生産し、交換し、消費するナマの経済である。このナマの経済の諸現象を理論的に分析することによって、つまり、それらの相互連関の因果関連をときほぐすことによって、それらを説明するうえで不可欠な最も単純でかつ抽象的な要因を折出する過程が「研究」であって、これをマルクスは出発点である経済の現実からの「下向の旅」と名づけた。マルクスがこの「下向の旅」によって到達したところの、資本主義分析にとって最も単純で抽象的な概念は、周知のように、商品である。経済学の叙述つまり経済学体系の展開は、この基本的概念から出発して「下向の旅」の出発点にあった現実の経済（具体的なもの）を経済学者の思考の中で「一つの精神的に具体的なものとして再生産すること」に他ならない。マルクスはこれを「上向の旅」と呼び、「直観と表象の概念への加工」を基本内容とす

る。経済学体系の展開とは、所与の現実の経済を概念に照応した姿で再現することである。「概念的に把握する」(Begreifen) ことがマルクスにおいては最も重視される。だが資本主義を描写する概念が個々に確立されただけでは、資本主義の全体像を概念的に叙述するには不十分である。諸概念相互間の因果連関を確定し、その因果連関に対応するように諸概念を配列し、因果連関の内容をしめさねばならない。経済学体系の展開の順序が問題になるのはまさにそのためである。この展開順序は一体何によって決まってくるのであるか。これについてのマルクスの見解はつぎの通りである。

「経済学的諸範疇を、それらが歴史的に規定的範疇だった順序にしたがって配列することは、実行もできないし、まちがいでもある。むしろ、諸範疇の順序は、それらが近代ブルジョア社会で互いにもっている関係によって規定される。……問題は、近代ブルジョア社会における経済的諸関係の編成 (Gliederung) である。」

この引用文中のキイ・ワードは「近代ブルジョア社会における経済的諸関係の編成」という概念であって、この概念の性格をどう理解するかがマルクス解釈の質を決定する。事実アルチュセールの独自のマルクス解釈もこの点から出発するのである。

かれはわれわれがさきに引用した文章について、Gliederung を「分節化された結合」(articulated combination)と規定して、つぎのように言う。

「現実の Gliederung、すなわち、ブルジョア社会の現実を構成する現実の分節化された総体についての認識を得るために、認識の対象として認識のなかで生産されねばならぬものこそ、まさに、この Gliederung、すなわち、この分節化された思考の上での総体性なのである。思考上の Gliederung が生産される順序は特殊な順序なのであって、正確には、マルクスが『資本論』において遂行した理論的順序、つまり、一つの思考上の全体、一つの思考上の具体物、すなわち、『資本論』の理論を作りだすのに必要な諸概念の連結と『総合』の順序なのである。」⁽⁸⁾

ここに資本主義の現実の編成と思考の上での編成を区別するアルチュセールの解釈の二つの特徴があらわれている。一つは「可視的なもの」(現象)と「不可視的なもの」(本質)との峻別と対応している。本来不可視的である本質は、思考の操作を経て概念としてしか把握しえないものである。現象の本質への還元をかれは「与件の概念への還元」ともよぶ。もう一つの特徴は思考上の編成(もちろん現実の編成も)を一つの総体として把握している点である。この総体性が、「本質の内的統一性(一つの概念のもとに統一される諸概念の体系性)」を保障する。⁽⁹⁾

以上の大前提のもとに、かれは一体系(総体構造)の内部では諸概念は相互に「結合」しあっており、その結合の連鎖が「階層システム」をなすと考える。この階層化されたシステムがかれのいう「構造」に他ならない。通常用いられる共時態(synchrony)と「通時態」(diachrony)の反対語をアルチュセールは「全体構造の各種の要素や構造のあいだに存在する特殊的關係を概念化したもの」⁽¹⁰⁾と独自に解釈し、共時態を第一義的(primary)

とみなす⁽¹¹⁾。かれにあっては総体構造があつてはじめてその部分構造が意味をもつそれゆえに、結合しあつている諸概念の階層システムが、その各部分概念を、それぞれのシステム内での位地と機能として定義することを可能とするだけでなく、さらにまた経済学の叙述においてそれら諸概念があらわれてくる順序をも決定する。総体構造の第一義性、これがアルチュセールの構造主義的『資本論』解釈の出発点である。

二 『資本論』の対象

アルチュセールは、経済学(および社会科学)におけるコペルニクスの回転が『資本論』において達成されたと考へる。この点を明らかにするために、『甦えるマルクス』⁽¹²⁾において、マルクスの有名な命題——「弁証法はヘーゲルにあっては逆立ちしている。その神秘的な外皮のなかに合理的核心を見出すためには、それを転倒させなければならぬ」⁽¹³⁾——を取りあげて、ヘーゲル哲学の全体系を否定することなく、方法としての弁証法だけを「転倒」させることは不可能であるとして、ヘーゲルとマルクスの間に決定的な断切があると主張したのと同様

に、『資本論』を読む』においては、古典派経済学とマルクスの経済学の間には「認識論的断切」⁽¹⁴⁾があると主張する。古典派経済学の批判的攝取という形で連続性があるかのようにとれるマルクス自身の文章が、かれのいう「マルクスの沈黙」なのである。この誤解を解くために、アルチュセールはまず古典派経済学の「対象」と『資本論』の「対象」との間に連続性があるという見方を批判する。

古典派経済学とマルクスとの間に「対象」の連続性を肯定すれば、両者が問題にしていることは同一(ブルジョア社会)であつて、古典派経済学が利潤や利子や地代という範疇で取扱つたものをマルクスは剰余価値というもっと広い概念でもって集約したにすぎないということになつてしまふ。両者の差は程度の差にすぎなくなり、まさにリカードはマルクスと紙一枚の差でしかないことになる。また一般化された理解によれば、古典派経済学は資本主義を「永遠の自然的秩序」とみていたために経済学の諸概念の歴史性を見失つたのに対し、マルクスがこれらの諸概念の歴史性を明確にした点に、両者の根本的差をみる。だがアルチュセールにいわせれば、

この見解のいう歴史なるものが歴史主義的時間——これをかれば経験的イデオロギーとしての時間ともいう——にすぎないのであれば「ヘーゲルが運動のなかにおかれたスピノザだといわれたように、マルクスは運動のなかにおかれたリカードウ」⁽¹⁵⁾に等しいといふとどまる。歴史化されたりリカードウは決してマルクスではない、とかれはいう。

このような見解をしりぞけて、アルチュセールが注目するのは、マルクスは「歴史的存在の構造」を問題としたことであり、「全体のすべての要素がつねに同一の時間のなかに、つまり、同じ現在のなかで共存」している相のもとで資本主義の構造を説明した点である。このことが可能であるためには、経験的イデオロギーとしての歴史を「垂直的に切断する」ことが必要である。このようにして切断された時間は特定水準の構造に「固有な時間」であって、構造の諸水準を結ぶ歴史的時間とは範疇的に区別しなければならぬ。この「垂直的切断」のうち「この切断によって明るみにだされる全体のすべての要素が相互に直接的な関係、つまり、それらの内的本質を直接に表現しあう関係におかれるような切断」が、

「本質的切断」と呼ばれる⁽¹⁶⁾。総体構造としての資本制的生産様式は、このような「本質的切断」によって初めて認識可能な諸概念の因果連関のシステムであって、マルクスが初めて方法的自覚の下にこの「本質的切断」を理論の上で行なった点に、マルクスにおける「問題意識の革命」⁽¹⁷⁾があるというのがアルチュセールの考えである。歴史的時間についての混乱をさけるために、「経験的イデオロギーからの脱却」(反歴史主義)が必要だとかれがいうのは、この点を強調するためである。

問題は、マルクスにおける「問題意識の革命」が経済学の対象と内容に対してどのような変革をもたらすか、という点であるが、この問題は後続の節でも当然取上げられねばならないが、さしあたりここではつぎの二点を指摘しておく。

(1) 「本質的切断」が可能なために現実的条件が必要である。アルチュセールはそれを「現在が本質を可視する『本質的切断』でなければならぬという。だが「本質的切断」を可能にする「現在」の内容については何も語っていない。その限りでかれの説明は同義反復にすぎない。ここにアルチュセールの立論の根本的な盲点

があるとわれわれは考えるのであって、この点についてはのちほど立ちもどることにする。

(2) アルチュセールが大きく取上げるのは、「問題意識の革命」が経済学の思考上の「対象」を新しく生み出すということである。かれは「実在する対象」と「認識の対象」とを区別したうえで、自分の問題をつぎのように定式化する。

「認識の対象を作ることが、実在する対象——これは思考の外で実在する世界に存在している——についての認識的領有 (cognitive appropriation) を生み出すのは、どのようなメカニズムによってであるか。」⁽¹⁸⁾

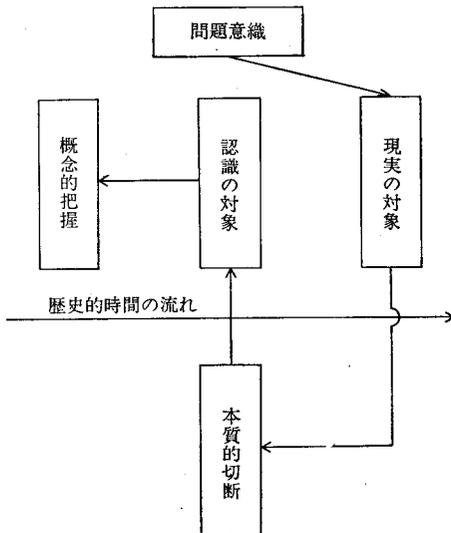
このメカニズムの中核に位置するのが「問題意識の革命」である。これが「認識の対象の变革」をもたらす。かくして、アルチュセールはいう、『経済学批判』とは、『経済学』に新しい問題意識と新たな対象を対立せしめることであり、したがって『経済学』の対象自体を疑問に付すことである」と。⁽¹⁹⁾ マルクスと古典派経済学との間に「認識論上の断切」があるというのも、この意味にお

いてである。

要するに、「本質的断切」を可能とするような「現在」に実在する世界を透視することができる歴史的時点に立っていたこと、そして自己の立脚点を方法的に自覚して、「本質的断切」に照応する思考上の世界に認識の対象を新たに切開いたこと、これが、かれによると、「マルクスの偉大な理論革命」の中心をなすものである。

以上のべてきたことを図解したのが別図である。出発

アルチュセール理論の構図



点は問題意識をもって現実の対象と接することである。現実の対象が総体を可視とする「本質的切断」を可能にするならば、現実の対象の総体を認識の対象とすることができ、概念的把握にいたる。これがアルチュセールの理論の基本的構図である。論理の流れは、問題意識→現実の対象→認識の対象→概念的把握(理論的認識)の順である。これは、いうまでもなく、マックス・ウェーバーの社会科学認識論(理念型による認識)と構造を等しくする。ウェーバーと異なるのは、ドイツ観念論に立脚するウェーバーは、問題意識は個人によって様々であって、それに応じて、その問題意識によってだけ可視となる現実の対象の、問題意識別の理念型が構築され、それを通して認識主体の問題意識にかかわるかぎりでの現実の対象が認識されうるとしたのに対して、現実の対象の総体的な概念把握を求めるアルチュセールは、それが可能となる「本質的切断」の時点を与件としただけである。この与件の意味についてはのちほどふれる機会があるであろう。

三 剰余価値論の意義

アルチュセールの議論は、資本制生産様式の総体が透視できるある本質的な瞬間において歴史的時間を切断し、そのような認識操作によって確定された経済学の対象を階層化されたシステム、すなわち、総体的構造として把握することであった。経済学の諸概念はこの総体的構造を表現あるいは叙述するための言語である。しかもかれのばあい、総体としての構造が第一義的なのであり、それゆえにこの総体を叙述するために用いられる諸概念は、この総体の中における位置と機能としてしか定義されないがゆえに、まず必要なのは、これら諸概念の定義を可能にするキー・カテゴリー、つまり、総体としての構造を概念化した概念である。それをかれは剰余価値に求める。すなわちかれはいう、「経済的現実そのものにおいて資本制的生産関係なる事実をあらわす概念が、資本制的生産様式においてどのようなものであるかをわれわれは知っている。それは剰余価値概念なのである⁽²⁰⁾」と。

このテーゼは一見常識的にみえる。マルクスの経済学において剰余価値概念の本質的重要性を否定するものは誰もいないからである。だがアルチュセールのいわんとすることはもっと厳格な含意をもつものである。かれが

主張したいのは、『資本論』全体を総括するキイ・カテゴリーとしての剰余価値である。このようない方は色々な含意をもつのであるが、この含意がテストされるのは『資本論』第三部の位置づけと『資本論』の位相を確定する点においてである。以下この二点についてのかれの考え方をみてゆくことにしよう。

〔A〕『資本論』第三部の位置づけ。

現行『資本論』は、第一部「資本の生産過程」、第二部「資本の流通過程」、第三部「資本制的生産の総過程」よりなるが、第一・二部と第三部の間にははっきり差がある。前者においては議論はすべて価値あるいは価値に照応した価格でもってなされ、剰余価値論が裸の形で展開されるのに対して、第三部においては、まず価値の生産価格への転化が最初に説かれ、剰余価値は利潤に転化した姿で取上げられ、それが商業利潤や利子や地代の形で分化・自立化してゆくことを追求しているからである。つまり、第三部の展開は、剰余価値のそのままでの分配諸形態を論じたものではなく(そうであれば第三部は第一・二部の議論の直線の延長であって、そもそもここで取上げるような問題はおこりえない)、転化された剰余

価値の分配諸形態としての自立化を論じたものである。このちがいが『資本論』第三部の特質である。マルクス自身第三部が第一・二部と相違する点についてはつぎのようにいっている。

「第一部では、それ自体として取りあげられた資本制的生産過程が、直接的生産過程——そこではまだこの過程の外にある事情の副次的影響はすべて度外視されている——として呈示する諸現象が研究された。だがこの直接的生産過程は資本の生涯のすべてではない。それは、現実世界では流通過程によって補足されるのであって、この後者が第二部の研究対象をなした。第二部では、なかならず第三篇で、流通過程を社会的再生産過程を媒介するものとして考察することによって、資本制的生産過程は全体として考察すれば、生産過程と流通過程との統一であることが明らかにされた。第三部で問題とするのは、この統一について一般的反省を試みることではありえない。問題は、全体として考察された資本の運動過程から生ずる具体的諸形態を見出し、それらを叙述することである。資本はその現実

的運動では具体的形態で対応しあう、すなわち、現実的運動を行う諸資本にとっては、直接的生産過程における資本の姿態や流通過程におけるそれが特殊の契機としてあらわれるにすぎないような具体的諸形態で対応しあうのである。したがって資本の様々な姿態は、われわれが第三部で展開するように社会の表面での種々の資本の相実行動である競争において、また生産当事者たちの意識のなかにあらわれる諸形態に、一歩一歩と近づく。⁽²⁾

この文章は『資本論』第三部の冒頭にあるものであって、第三部の性格づけをマルクス自身が行なったものとして重視され、色々な解釈を生んだ。鈴木原理論では、この文章を根拠として、第三部は諸資本の競争の現実的機構を説明するのが主眼であると解し、第一・二部と第三部の間には論理展開の次元において本質と現象あるいは実体と形態の相違があるとしたことは周知の通りである。⁽²⁾鈴木原理論ほど徹底はしていないが、第一・二部から第三部へは、マルクスの経済学の方法でいうところの抽象的なものから具体的なものへの移行であるという理

解は一般的であるといつてよいであろう。ところがアルチュセールは、この種の見解を「本質的な、原理的に抽象的な内在性から具体的な、眼にみえ感じとることのできる外的な諸決定への移行」と解したうえで、真正面から反対するのである。

「第三部の具体的なるもの、すなわち、地代、利潤、利子についての認識は、すべての認識と同じく、経験的に具体的なものではなく、概念なのであり、したがって相変らず一抽象である。……『資本論』の第一部から第三部への移行は、思考の上での抽象的なものから実在的な具体物への移行、すなわち、実在的な具体物を知るために必要な思考の諸抽象から経験的具體物への移行とは何の関係もない……。第一部から第三部までの間で、われわれが抽象から離れることはないのであり、認識、この『思考と想像の産物』から離れることはない、すなわち、われわれが概念から離れることは決してないのだ。われわれはただ単に認識という抽象の内部で、構造と構造の一般的结果についての概念から、構造の特殊な結果についての概念へ移動した

にすぎないのであって、一瞬たりとも概念の『発展』あるいはその特定化を事物の発展ならびに特性から分けへだてるところの絶対超越えることのできないフロンティアからはみでることは決してないのである。⁽²³⁾

みられるように、アルチュセールは『資本論』第三部の課題を剰余価値概念の特定化であると把握し、第一部から第三部への移行を総体概念から部分概念への概念的移行とする。これがまさしくアルチュセールの構造主義的『資本論』解釈の真随であって、コーガンが『資本論』全三部を「広義の剰余価値論」とする立場と相通ずる。⁽²⁴⁾ わたくしの立場も基本的にはこれに近い。『資本論』全三部の構成をこのように本質の世界の内部における論理(あるいは概念)展開の発展と把握せずに、「次元の相違」論のように本質から現象への移行と誤読してしまふと、自己の立場と論理一貫的に、すなわち、競争を媒介した資本の運動の現実的機構論として『資本論』第三部を再構築すればするほど、剰余価値の分配の視角が希薄化せざるをえないのである。⁽²⁵⁾

〔B〕 剰余価値論の位相——「理想的平均」について

アルチュセールのように、『資本論』を剰余価値概念を基軸とした資本主義の構造理論の完結大系——これを以下では『資本論』の世界とよぼう——であると考へても、まだ重要な問題がのこる。資本制的生産様式についての全認識のなかで『資本論』の世界は一体どこに位置するのか、その位相の問題がそれである。かれ自身「経済的なものについて概念を構築することは、これを生産様式の段階、審級(Instance)あるいは領域として厳密に定義することであり、したがってこの構造の中にその場、その存在、その本来の限界を定義することである」⁽²⁶⁾とのべているが、ここにいう「経済的なもの」の内部においても同じことがなされなければ、『資本論』の世界あるいはかれのいう「剰余価値論」自体の「概念化」は達成されないであろう。『資本論』だけで「経済的なもの」のすべてをカバーすることはできないからである。『資本論』の世界の位相についてマルクス自身が語っているのはつぎの有名な文章においてである。マルクスは『資本論』の終りのほう(第四八章「三位一体の定

式)で、自分が『資本論』全三部で展開してきた議論を物神性——「物の人格化と生産関係の物化」——の深化・発展の視点から総括したのちに、つぎのようにいう。

「生産諸関係の物化と生産当事者たちに対する独立化の説明(『資本論』全三部)において、われわれは、世界市場、その諸景況、市場価格の運動、信用の期間、産業および商業の循環、繁栄と恐慌との交替を通じて、いかに諸関連が彼らにたいして、圧倒的な、彼らに無意志的に支配する自然法則として現われ、彼らに对立して自己を盲目的必然として貫徹する仕方・様式には立ち入らない。なぜ立入らないかといえば、競争の現実の運動はわれわれの計画外にあるのであって、われわれはただ資本制的生産様式の内的組織を、いわばその理想的平均 (ideale Durchschnitt) において叙述しさえすればよいのだからである。」⁽²⁶⁾

ここでいわれていること、なかんづく「資本制的生産様式の内的組織をその理想的平均において叙述する」ということの含意をどのように解釈するかは、『資本論』

の基本性格をどのように解するかにとって決定的な意味をもっている。アルチュセールは『資本論を読む』の第二論文『資本論』の対象の補遺においてこの問題をとりあげ、きわめて哲学的な解釈を下す。すなわち、マルクスのいう「理想性」(ideality)は「理念性」(ideality)すなわち対象についての概念としての性質であり、「平均」はその概念の内容であって、経験的抽象の結果ではない、と解し、「マルクスの理論の対象は理念であって、それは概念という抽象における認識でもって定義されているのだ」と⁽²⁷⁾。また同じことをつぎのようにもいっている。

「マルクスが『理念的平均』を研究しているというばかり、われわれが理解しなければならないのは、この理念性は現実に存在しない、あるいは、観念的な規範ではなく、現実についての概念であり、かれの『平均』は経験的平均ではなく、すなわち、non-unique (個別性を消したものを)を含意するのではなく、逆にそれは、問題となっている生産様式の特殊の差異についての概念をいみしている、ということこれである。」⁽²⁸⁾

ここにみられるアルチュセールの解釈にはかれの構造主義的『資本論』解釈の特徴と歪みとともにあらわれている。『資本論』を資本主義の歴史的総体構造を説明する概念の体系であるとする立場から、idealeを「理念的」と解するのは当然であり、そこに構造主義的『資本論』解釈の真随があることはすでにみたところである。だがマルクスの「平均」は経験的平均ではないとした点には若干の歪みがある。この歪みはかれの「反ヒューマニズム・反歴史主義」の立場と不可分に結びついている。それをしめすのがつぎの文章である。

「剰余価値が測量可能な現実ではないということは、剰余価値が物ではなく、ある関係についての概念、現実の生産の社会的構造についての概念、われわれがやがて定義するであろうような意味で『結果』においてのみ可視で、測定可能な一つの実在についての概念であるということに由来している。剰余価値がその結果においてのみ存在するということは、剰余価値がその決定的な諸結果のいずれの一つにおいても完全に把

握されうることを意味するのではない。そのためには、剰余価値はその結果のなかに完全に現存していなければならぬであろうが、それが構造として現にあるのは、まさにその結果が決定的に消えてしまった（不在の）⁽²⁹⁾ときにおいてである。」

このような屈折した思弁の結果到達したのがマルクスの「平均」は経験的平均ではないというさまのテーゼである。この引用文でかれは構造についての概念は「結果においてのみ見える」ことは認めている。現実の対象と経済学の対象とが現象を通して対応しなければならぬことはかれも認めている。だがかれは両者の間に認識論上の相互不可分の関係があることは否定する。かれの用いた比喻を用いれば、ニュートン以前の物理学者も確かに物体の落下するのを「みた」にちがいないが、万有引力の法則を「みた」のはニュートンでしかない。このことは、概念（法則認識）から現実（現象）への照射はみとめるけれども、現実（現象）から概念への逆照射は否定することを意味する。さらにこのことは、現実の対象は不変であることを含意する。物体は地球初って以来常に

落下してははずである。アルチュセールはこのアナロジをマルクスの経済学にもみようとしている。そうなれば、古典派経済学とマルクスの経済学の相違という点に関連していえば、双方とも同一の現実の対象（資本主義）をみていたが、両者の間に問題意識（資本主義をみる眼）に決定的な相違があったために、古典派経済学では資本主義の概念的把握ができなかった、すなわち、これらに欠けていたのは「概念の欠除」なのであり、それはマルクスのなしたような「問題意識の革命」が出来ていないからだ、ということにならざるをえない。マルクスの「問題意識の革命」は資本主義の総体が可視となる歴史的現在を「本質的に切断」することによって可能となるのであるが、この「本質的切断」を可能にする歴史的現在の内実についてアルチュセールは何も語っていないこと理由はここにおいて明らかであろう。ここにアルチュセールの沈黙がある。

さかのぼっていえば、アルチュセールが『資本論』の認識論上の命題として論じているのはもっぱら問題意識の革命であり、その革命によって確立される経済学（思考）の対象であり、それを叙述する概念や用語である。

われわれが『資本論』における認識論上の最大の問題と考えるところの、『資本論』の世界の成立のための現実的機構は何か、アルチュセールの用語を用いるならば、「本質的切断」を可能にする歴史的現在の実体は何であり、それから如何にして『資本論』の世界が理論の対象として成立することになるかについての認識論的根拠は、かれは決して問題として取上げないだけでなく、問題の所在すら意識していない。この欠陥が、マルクスの平均概念は経験的平均でないという命題として定式化されている。だが、古典派経済学者とマルクスでは表象していた（直接にみていた）現実の対象（資本主義の内容）が根本的に異なるのである。古典派経済学の完成者といわれるリカードが著『経済学および課税の原理』（一八一四年）を構想し執筆したのは産業革命の前夜であって、産業資本主義はまだ成立しておらず、資本制的生産様式に固有の周期的恐慌をみていなかったのである。そのためリカードの経済学の主題は、資本家階級と地主階級の利害対立であって、資本対賃労働の階級対立は副次的な位置にとどまっている。マルクスが「地代は資本なしには理解できない。ところが、資本のほうは地代

なしでも理解できる。資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である。資本が出発点にも終点にもならない⁽³⁰⁾なければならない」といえるようになるためには、単なる問題意識の革命^{II}認識主体の意識の上だけの革命だけではなく、その革命を支える客観的条件の成熟がなければならぬ。そうだとするならば、アルチュセールのいう「本質的切断」の時期は決してリカードウ以前の時期にはありえないのであって、産業資本主義確立後でなければならぬ。そして、その時には資本制的生産様式は周期的恐慌を伴う経済体制に転身していた。このゆえにこそ、資本主義の構造分析——これはアルチュセールのいう特性をもっていたにしても——は、「理念的平均」において叙述せざるをえなかったのである。産業循環が平均世界を生みだす平均化機構に現実になっているために、平均世界としての『資本論』の世界を概念的に確立することができる、というのがわれわれの見解である。

四 結語

アルチュセールの『資本論』解釈は、その構造論とし

ての特性を明確に浮び上らせた点ではきわめて重要な貢献であるといえる。だがかれの立論は構造(この不可視の世界)の第一義性を強調するあまり、可視的なものの意義を過少評価しているといわねばならない。経済の領域において可視的なものといえば市場価格の運動であり、それをめぐって行なわれる資本の現実的運動が産業循環を必然的にもたらすのであるが、残念なことに、アルチュセールは、循環論と構造論の関係(前者が後者の認識論的根拠、後者を抽象する現実的基礎になっているという関係)を完全にたち切ってしまった。かくしてかれの構造論は客観的基礎を欠き、観念論的思弁に転落する。このようになるのは、かれの「反ヒューマニズム」と関係があるように思う。かれが考えている「ヒューマニズム」とは、個人が行動主体であって、個々人の主観的行動の結果として社会が成立するという原子論的社会観のことであり、それを否定して、個人の主体的行動なるものは所与の客観的な構造によって規定されるというのが、かれの「反ヒューマニズム」(反人間主体主義)である。この視座から、「物神性の仮象は決して主観的なものではないのであって、『意識』や知覚の『錯覚』

なるものはそれ自体副次的なものであるがゆえに、それは徹頭徹尾客観的なものである」と明瞭に言いきったのはもちろん正しい。だがこの視座を一面的に強調すると過度の単純化におちいることは、個人の主観的行動を資本主義の現実に合わせて資本の現実的運動におきかえてみると直に判明する。現実的運動を行なう資本主義主体はすべて物神性の世界の住人である。かれらの取結ぶ諸関係はすべて市場価格をバロメーターとする取引関係であって、それが生みだすのは直接には産業循環である。経済主体の活動は構造によって規定されることを主張したいアルチュセールは、この産業循環が『資本論』の世界と相並び、その抽象の基礎をなす一つのシステム、あえていえば、もう一つの構造であることを見過している。ここにアルチュセールの「反ヒューマニズム」の限界をみることができるのである。

- (1) 『資本論』を読む(注)(3)をみよ、一七六ページ。
- (2) 同、一四三ページ。
- (3) アルチュセール／バリバル『資本論』を読む、権寧、神戸仁彦訳、合同出版、一九七四年。引用文のページはすべてこの日本語版のものであるが、訳文は英語版

Louis Althusser, Etienne Balibar: *Reading Capital*,
Ben Brewster tr. 1975. を参照して修正してある。

- (4) マルクスからラッサールへの手紙(一八五八年二月二日)『資本論に関する手紙』、岡崎次郎訳、法政大学出版局、一九五四年、七六ページ。
- (5) マルクスからシュヴァイツァーへの手紙(一八六五年一月二四日)『マルクス・エンゲルス全集』、大月書店、第一六卷、二六ページ。
- (6) マルクス『経済学批判要綱』、高木幸二郎監訳、大月書店、一九五八年、二一―三〇ページ。
- (7) 同上、二九―三〇ページ。
- (8) 『資本論』を読む、四八ページ。
- (9) 同上、一二八ページ。
- (10) 同上、一六〇ページ。
- (11) 同上、八七ページ。
- (12) ルイ・アルチュセール『甦るマルクス』I、II、河野建二、田村俊訳、人文書院、一九六八年。
- (13) マルクス、『資本論』、第一部、第二版後記。
- (14) 『資本論』を読む、二二三ページ。
- (15) 同上、一四〇ページ。
- (16) 同上、一四三ページ。
- (17) 同上、一三九ページ。
- (18) 同上、七一ページ。
- (19) 同上、二三〇ページ。

- (20) 同上、二六一ページ。
- (21) マルクス『資本論』第三部、『マルクス・エンゲルス全集』大月書店、第二五卷、三三一―四ページ。
- (22) わたくしの『マルクス経済学研究』、新評論、一九七九年、第五章をみよ。
- (23) 『資本論』を読む』、二七四ページ。
- (24) コーガン『経済学批判プランと『資本論』』、中野雄策訳、大月書店、一九七九年、二四―五ページ。
- (25) この危険性をわたくしは佗美光彦氏の最近の力作『世界資本主義』、日本評論社、一九八〇年。
- (25) 『資本論』を読む』、二五八ページ。
- (26) マルクス『資本論』、全集版、第二五卷、一〇六―四ページ。
- (27) 『資本論』を読む』、二八三ページ。
- (28) 同上、二八四ページ。
- (29) 同上、二六一ページ。
- (30) マルクス『経済的批判要綱』(前出)、二九ページ。
(一橋大学教授)